小さな提言

近頃、思うこと

おっぱらD
Wojisan

(一)

「子どもが、二酸化炭素は空気より重いということを言えたり書けたりすることも大切だが、水槽の中に溜った二酸化炭素を、ちょうど水でも空けるように水槽を反せることの方が大切ではないか。」

これは、かつて、ある研究授業後の協議会で、先輩の先生が口にされた意味深いことばである。私は、このことばを聞いた時、一種のカルチャーショックとでもいおうか、強い衝撃を受けたのを覚えている。

なぜなら、その当時、私の授業は、使い古された感のあることばであるかもしれないが、「教科書を教える」ということに他ならぬことを、毎日繰り返していたからである。すなわち、教科書に載ってある一字一句をもらさず、より詳しく解説したり、その時間だけの課題を与えることによって、子ども達に知識を伝えることが授業であり、それが、自分に与えられた当然の務めであると思っていたのである。

今から思えば、そこには、自ら教材と対決しようとする子どもの姿はなく、歴史的事実や知識をのみ込まされている子どもか、教師の指示通りに動く子どもの姿だけがあったように思う。それゆえ、勢い、授業における子ども達の学習意欲も乏しく、高まりのないものであったにちがいない。

(二)

その後、教育実践を重ねていく過程において、私の内で変わってきたことがある。その一つは、「今している活動が、その単元全体の中で、どのような位置・意味を持っているのか」を意識すること(具体的にいうと「水素」そのものを学習しているのではなく、水素を手がかりにして「水溶液」を学習しているのだということを意識すること)、今一つは、「なるべく、子どもの疑問からスタートして問題が生まれてくるような課題提示の工夫をすること」の大切さに気づいてきたことである。

いいかえれば、「一時間、一時間、細切れに課題を与え、子どもを無理に動かす」教師中心の授業よりも、「子どもの発想を大事にしながら授業を組み立て、子どもが主体的に活動することを期待する」子ども中心の授業の方が、より問題意識も持続し、ひいては、学習意欲も高まるであろうと考えるようになったのである。

これらのことに関連して、さきやかな実践例を挙げてみることにする。

よい土づくりから

「光の進み方」の導入段階で、「凸レンズの一部をかくしても光の点はできるだろうか」という課題を与えるのでは、やや子どもにとって唐突であろうと思えたので、先ず、一時間、虫めがねで自由に活動をさせ、子ども達の様子を観察してみた。最初は殆んど、全員紙こがしをしていた子どもが、「先生、S君のレンズは広くてぶ厚いので、指で影を作っても紙がこげる。」という一人の声を契機に、「どのレンズでも一部をかくしたぐらいでは、先の点は消えないのではないだろうか」とか、「光の点はどのようにしてできるのだろうか」という疑問に発展し、スムーズに問題意識が生まれ、持続したように思う。

「太陽高度と気温の変化」の学習では、「温水器がなぜ南向きにしかも平面な屋根の上でも斜めに置いてあるのだろうか」が問題となり、その因果関係を、太陽の動きと高度、気温との関係で説明しようとした子ども達は、測り終えて、次の疑問(地温との関係)へと発展していったのである。

「わたしは、気温が一番高い時は、太陽の角度が大きいと思っていたけど、気温が高いのは、午後二時ごろで、角度の一番大きい時は、十二時ごろということが分かった。分からないことは、どうして気温が高い時に角度も大きくならないんだろうかということです。もしかすると、とうめいなものは光を通して、さえぎるものの温度を上げるということと関係があるのでしょうか。」というふうに……

(三)

季節による太陽高度の違いを知っても、それを、自分の部屋に差し込む日ざしの変化に結びつけて考えられない。しかし、そのことを失望するよりも、私は、子ども達がどんな部屋に住まいしているかを知っていただろうか。

問題意識を持続させるといっても、子ども達に助けられているという感が強いのは、このような教材研究の上すべりに起因していると思われる。

授業に臨む時には、何らかのめあてを持たなければ、心許無いという気持ちを子どもたちが抱けるような授業づくりをしたい。

常に、子どもひとりひとりをとらえる手がかりを求めながら……。

(・教諭)